

つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 156号 2010.9.24 発行 社会政策研究所

「絆はなぜ切れた」と「社会保険料の負担増」9月20日から24日までの毎日新聞の2つの5回シリーズの連載をお届けします。じっくりとお読みください。【kobi】

絆はなぜ切れた：高齢社会の家族 / 1 「所在不明」人ごとじゃない

絆はなぜ切れた

親の生死すら知らない - -。今夏相次ぎ判明した高齢者の所在不明問題は、深刻な家族関係の希薄化を浮かび上がらせた。高齢社会の底流で何が起きているのか。肉親の結びつきからはぐれたお年寄りやその家族を訪ねた。【清水優子、水戸健一】

病气抱え独居 「子に迷惑かけるわけには」

さび付いたドアを開けると、6畳の殺風景な和室に小型テレビとベッド、小さなタンスが並んでいた。弁当の空箱やレジ袋が散らばり、出っぱなしのコタツは布団がうどんの汁やたばこの焦げで黒ずんでいる。

残暑厳しい9月の日曜日、記者は東京都大田区で「たかせクリニック」を営む高瀬義昌院長（54）の訪問診療に同行した。「たばこ減らした？」「1日10本くらい。値上がりするしなあ」。茶飲み話をしながら、高瀬院長が手際よく男性（77）の脈や血圧を測る。

目が覚めてから眠るまでの約16時間、部屋のテレビで好きな時代劇などを見て過ごすという。「誰とも話さない日も珍しくないよ」と寂しそうに笑う。

男性は福岡県で3人きょうだいの末っ子として生まれた。炭鉱で働き結婚し一人息子を授かったが、妻を病で失った。息子も成人して恋人ができ、50代のとき単身で上京。タクシー運転手などで生計を立てた。

60歳を過ぎたころ、駅のホームで突然倒れた。脳梗塞（こうそく）だった。後遺症で左半身が不自由になり、今は年金と生活保護が頼りだ。

兄はすでに亡く、姉は宮崎県にいると聞いた。長男とは妻の死後、音信不通になったままだ。テレビが孤独死を報じると、自分の最期を重ね合わせる。「いつ死んでも構わない。息子は元気でいてくれればいい。ただ、全く歩けなくなる前に、故郷で両親の墓参りをしたい」

京浜工業地帯にある大田区は、23区内でも高齢化のスピードが速い地域のひとつだ。独居高齢者は09年度で4万2000世帯と、5年間で9000世帯増加。高瀬院長の往診先も年々、独り暮らしのお年寄りが増えている。

私鉄沿線の木造アパートでは、仲宗根さん（61）が往診を待っていた。十数年前に沖縄から上京して以来、この4畳半1間で1人暮らし。「妻がうつ病で自殺したんです。とても愛していました。でも子どもとは疎遠になっていた」。沖縄にいる理由はなくなった。そして東京には仕事があった。

2年前に脳出血で倒れ、左手足が動かなくなってから、急に心細くなったという。そして今年1月、「1人で死ぬ寂しさと怖さ」を突きつけられる出来事があった。

真上の部屋に60代の男性が住んでいた。廊下で会釈する程度の付き合いだったが「そういうば最近、姿を見ない」と気になった。仲宗根さんは階段を上がれないので他の住人に見に行ってもらおうと、布団の上で冷たくなっていた。死後3日が過ぎていた。

子どもたちは家庭を築き、孫が生まれたと人づてに知った。「そばにいてくれたら……でも今さら、切れてしまった絆(きずな)が戻るはずもない」

平日の昼下がり。今度は同じ大田区にある2階建ての一軒家を訪ねた。民間業者が運営し、介護の必要な生活困窮者十数人が暮らす「共同住宅」。昼食後、冷房が利いたリビングで5人の入居者がぼんやりテレビを眺めている。認知症の人もいて、会話は少ない。

共同住宅の経営者が説明した。「入居者と家族との関係は、ほぼ切れています」。見舞いがあることはまれで、共用電話に時々かかってくる電話も「体調を気遣うようなものでなく、経費の支払いに関する問い合わせなど」という。

「うば捨て山みたいな所でしょ？でも気に入っているの」と、1年半前に入居した節子さん(77)が声を潜めて話し始めた。

夫は心臓疾患で40年前に先立った。足に障害がある独身の長女(59)と、借金と6人の子を抱える長男(57)がいる。長女は年に数回顔を見せに来るが、長男とは5年間連絡を取っておらず、電話番号も知らないという。

夫亡き後の生活は楽でなく、一家だんらんの記憶はない。でも節子さんには「悪い親ではなかった」との自負がある。若いころは企業の社員食堂を切り盛りし、70歳までホテルの受付として働いた。長女が中古アパートを買う際は頭金を出し、長男が事業に失敗すると借金を肩代わりした。長女と一緒に暮らしたこともあったが、お互い気性が激しく、節子さんから飛び出してしまった。

そしてアパートで1人暮らしをしていた2年前、室内で倒れた。半日後、別室の高齢者を訪問したケアマネジャーが窓越しに気付き、救急車を呼んでくれた。「運が悪ければ私も白骨化していた」。退院する際、長女に「1人暮らしは心配」と言われたが、また同居しようという意味ではなく、この共同住宅に入ることになった。

しかし、体調が回復し介護が必要でなくなれば、ここも出なければならない。「一緒に暮らしたい気持ちはあるけれど……」と寂しげな表情を浮かべ、首を振った。「子には子の人生がある。最期に迷惑をかけるような親にはなりたくない」

節子さんの居室は6畳間を板で半分に仕切ったスペース。時折、板の向こうから激しいせき込みが聞こえてくる。「できればこの家で死に、あそこに埋めてほしい」。窓越しに、洗濯物が揺れる小さな庭を眺めていた。

絆はなぜ切れた：高齢社会の家族 / 2 生活、老親の年金頼り

息子が父親の遺体を隠した部屋。裁判では「火葬にしてあげられず、申し訳なかった」と言った=神戸市内で、遠藤和行撮影

中高年で「ひきこもり」/死を隠し不正受給も

閉ざしたドア越しに、玄関へ向かう父の足音が聞こえる。息子は「散歩か」と思いつつ、部屋から顔を出し「行ってらっしゃい」と言う気はない。父も期待していないのか、「行ってきます」の声はない。

42歳の男性は、父(80)と2人暮らしの札幌市のマンションにひきこもるようになって7年になる。母は20年以上前に亡くなり、兄は既に自立した。



大学卒業後、男性はアルバイトを転々とした。郵便局で非常勤職員として働き始め、人間関係で悩んだ末に退職した。

元公務員の父は昔から厳格だった。運動が得意な兄は可愛がられ、自分はいままでか意思疎通できなかった。郵便局を辞めたことを「家族なら分かってくれるかも」と淡い期待を持って伝えた。父は激高した。「人生を台無しにしたな。これからどうやって生活するつもりだ!」。男性は部屋にこもりがちになった。

自助グループに参加して同じような若者の家を訪問し相談に乗るようになり、今はNPOから月4000円の報酬を得ている。生活費にはとても足りず、蓄えを切り崩す。国民年金保険料は父が老齢年金から払ってくれる。感謝の思いは伝えられないでいる。

8月下旬、男性は久しぶりに居間で父と向き合った。自分の活動が月刊誌に取り上げられたことを知ってほしかった。社会とつながり、再就職の糸口にしたい。喜んでもらえると思ったが、父の言葉は口調こそ違ったものの、7年前と同じだった。会話は続かず、それぞれの部屋に戻り別々に食事をした。

家族からは、職場のように逃げ出せない。「このまま冷え切った関係で終わるしかないのか」と男性は肩を落とす。親亡き後、住む場所も年金もないかもしれない。「今のうちに自立しなければ」と焦るが、40代の定職探しは容易ではない。

内閣府は7月、15～39歳のひきこもりが推計69万6000人に上ると公表した。約半数が30代だが、中高年のひきこもりに詳しいNPO法人「レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク」(札幌市)の田中敦理事長は「40～50代を加えると、平均年齢はもっと上がるはず」と指摘する。田中理事長によると、中高年のひきこもりは「親が親せきや近所に知られたくないという思いが強く、密室化しやすい」という。親の死後、子が完全に孤立する恐れもある。

ひきこもりが高齢化する背景には、社会に出てつまづく人の多さがある。国の調査でも「職場になじめなかった」「就職活動がうまくいかなかった」が、ともに20%を超えている。非婚化も進み、老親の年金を頼りに同居するパラサイトシングルが親の死を隠し不正受給する事件も後を絶たない。

神戸市北部。有馬温泉に続く私鉄沿いの住宅地に、築およそ20年の市営団地がある。

08年8月、2階の一室で腐敗した80代男性の遺体が見つかった。同居する無職の息子(58)が1年半前に死亡した父をビニールでくるんで押し入れに隠し、年金362万円を不正に受け取っていた。家賃滞納で退去を迫られ、事実が発覚した。

死体遺棄と詐欺罪に問われた法廷で、息子は淡々と事実を認めた。検察側は「経済的困窮を恐れ、怠惰な生活を維持したいがために遺体を放置した」と指摘。懲役2年4月の実刑判決が言い渡された。担当弁護士は「家族仲は悪くなく、父親も、職がないなら年金で暮らせばいいと思っていたようだ」と話す。

団地を訪ねると、同じ棟に息子をよく知る女性(66)がいた。女性によれば、息子は4人家族。父は定年後も団地の役員を務め、住民に信頼されていた。母は病気がちで、弟は婿養子に出た。

2人の出会いは10年前。女性が清掃のパートを始めた宿泊施設で息子が働いていた。「口数が少ないけれど、私がミスをするとかばってくれました」。息子は女性を「ねえさん」と呼ぶようになり、家に来ては孫の遊び相手をしてくれた。

だが事件の6年前、息子は突然仕事をやめる。「おやじが骨折して入院し、お袋の世話をしなければならなくなった」と言っていた。「お袋には可愛がってもらった。早く帰って風呂に入れないと」。おっくうがる様子はなかった。

その後、母は認知症が進み、特別養護老人ホームに入所した。父も寝込みがちになった。父の年金月約20万円から母の入所費用12万円を払い、家賃滞納が始まった。それでも「逮捕直前まで面会に来ては、入所費用を払っていた」とホーム関係者は明かす。

女性は息子がよく新聞の求人欄を見ていたのを覚えている。「50を過ぎて車の免許もない者に仕事はない」とあきらめ顔だった。

逮捕後、女性が面会に駆けつけると「おやじに悪いことをした。生活保護の相談に行けばよかった」とうなだれていた。「親しかったのに、生活に困っていたことは、何も言ってくれなかった。これから困った時は誰かに相談してほしい」と女性は願う。還暦が近い息子にも、頼れる家族のない老後が待っている。

息子は服役し、女性と手紙のやりとりを続けている。刑務所内で介護ヘルパーの資格取得を目指して勉強し、「今度はお年寄りを大事にしたい」とあった。

事件が起きた2階の一室は、今も空き部屋のままだ。玄関には、父と母と息子の名が並んだ表札が残っていた。そこには、家族が絆（きずな）で結ばれた、穏やかな日々があった。【遠藤和行、水戸健一】

絆はなぜ切れた：高齢社会の家族 / 3 そばにいるのに孤独



会話の最後には「おやすみなさい。大丈夫ですからね」と伝える相談スタッフ＝東京都内で今年8月、遠藤和行撮影

交流ない2世帯住宅 階下の親の死、1カ月知らず

深夜、東京のオフィス街にある雑居ビルの一室。電話を切ったとたんに、次の着信音が鳴る。

「よかった、通じて……。久しぶりに人と話せました」。弱々しい声で語り始める。悩みで眠れない人。自殺をほのめかす人。まずは傾聴し、意見を伝え、不安を和らげ、静かに電話を切る。「おやすみなさい。大丈夫ですからね」

東京社会福祉士会は12年前から毎晩、高齢者の電話相談（電話03・5215・7350、午後7時半から10時半）を続けている。相談してくる人の7割は1人暮らしだが、同居する家族に気づかれぬように電話してくる人もいる。

相談員たちは普段働く福祉や医療の現場でも、高齢者の孤独を目の当たりにしている。特に最近目立つのは、外から見えにくい「家庭内独居」だ。

ある社会福祉士に「デイサービスだけが楽しみ」と言った70代の女性がいた。息子の結婚を機に自宅を2世帯住宅風に改築し、一つ屋根の下に住んでいた。息子家族の居住スペースとは縁側の廊下でつながっているが、途中に仕切りドアが設けられ、鍵を付けられた。解錠は息子の側からしかできず、開けてもらえるのは正月と誕生日、親類が来た時くらい。

女性は「自分の身に何か起きてもどうしようもない。きっと私、孤独死するのでしょうね」と、寂しげに笑ったという。

同会の中野幸二さん（63）は話す。「子や孫と同居しているのに、家族と分断されている高齢者がいる。その孤独は時として、独り暮らしの孤独よりも深い」

すぐそばに住んでいても、さまざまな事情が親子の心の距離を遠くしている。大田区の敬子さん（54）の場合、母の病だ。

82歳の母が1人で暮らす実家までは、家から自転車で5分。「一人娘だし、離れていると心配。でも同居すれば、うちの家族が壊れてしまう」とため息をつく。

結婚後しばらくは実家で母と同居していた。子どもが生まれ手狭になり、15年前に新居を建てた。迎え入れる和室を造ったものの、母は「慣れた家がいい」と同居を拒んだ。

そして数年前、母に認知症の症状が出始めた。2日に1回は近所を徘徊（はいかい）し、保護される。敬子さんはそのたびに呼び出され、迎えに行かねばならない。ついに昨秋、

パートを辞めた。

先日も早朝から大きな音で笛を吹き、近所の人々が警察に通報した。駆けつけて笛を取り上げようとして、取っ組み合いになった。近所には「放っておかれて寂しいから問題を起こすんだ」と責められる。しかし子どもたちは母を嫌い、単身赴任中の夫（54）は関心すら示してくれない。「私が面倒を見ているうちは孤独死の心配はない。でももう限界。自分がおかしくなりそうで、早くいなくなしてほしい、とつい思ってしまう」

認知症患者は25年には323万人と推計されている。核家族化が進み、離れて暮らす親の発症に病が進行して気づく人も多い。支援の乏しさから負担は家族にのしかかり、関係が壊れていく。それを本人たちだけで修復するのは難しい。

「死後約1カ月たった男性の遺体が見つかった。すぐ来てほしい」。4年ほど前の盛夏、遺品整理会社「キーパーズ」（本社・愛知県刈谷市）社長の吉田太一さん（46）は連絡を受け、愛知県内の公団住宅に向かった。男性は1人暮らしの75歳。依頼主は葬儀社と男性の息子だった。

公団住宅は古い5階建て。1階で50代ぐらいの息子と落ち合い、父親の部屋がある3階まで階段を上った。腐乱臭は1階まで漂い、階段にもウジ虫がはい出していた。

部屋の鉄扉を開けたとたん、息子は一步も動けなくなった。遺体は既に運び出されていたが、奥の和室には敷かれたままの布団が残され、しみ出た体液で人形に黒く変色していた。吉田さんは1人で部屋に入って殺虫剤をまき、外に出た。

「こっち、こっち」。声がする方を見上げると、息子が4階と3階の踊り場で明るく手を振り「自分の部屋に戻ってました」と謝りながら下りてきた。息子の住まいは父親の部屋の真上だった。

「終始あっけらかんとし、涙はもちろん、後悔のかけらも見せなかった」と吉田さんは振り返る。「これじゃ、この辺に住めなくなるなあ」とこぼす息子に「もう少しこまめに部屋をのぞいてあげたらよかったですね」と声をかけると、初めて神妙な顔を見せ「私もそう思います」と答えた。

息子は3年前に離婚して小学生の長男と2人暮らし。夜勤が多い職場で父親と会う機会が少なく、異臭にも気づかなかったという。

同社では02年の設立以来、年間約1800件の遺品整理を請け負う。その9割が孤独死で、特に最近増えているのが「同居内孤立死」。2世帯住宅や同じマンションに住む親子なのに交流がなく、死後数日たって気づくケースだ。

しかし吉田さんは「昔に比べて家族の絆（きずな）や親を思う気持ちが薄れたというわけではない」と強調する。「子が親の面倒を最期までみられた時代は遠くなった。社会の仕組みや経済状況など、生活の土台が激変し、今の子世代は自分が生きるのに精いっぱいなのです」

老後を血縁だけに頼るよりも、地域で「あの人、最近見ないね」と気づいてもらえるような関係を築いたほうがいい。たくさんの孤独死を見つめてきた吉田さんの答えだ。【清水優子、遠藤和行】

絆はなぜ切れた：高齢社会の家族 / 4 近所同士、合鍵持ち合い

独居化進む老朽団地、地域の力で「孤独死ゼロ」へ

昨年秋、東京23区東部の高層賃貸マンションを訪ねた看護師は、高齢の女性が正面玄関のガラスに直撃し、転倒する場面に遭遇した。看護師は別の高齢者を見回りに来たが、女性の様子がどこかおかしいと感じた。

話を聞くと、70代で1人暮らし。子はなく、親族は遠方にいるという。看護師は公的な支援を持ちかけた。女性は「大丈夫。必要ありません」と丁寧な口調で拒み続けた。

ようやく見守り訪問を受け入れたが、部屋の玄関までしか入れてくれない。看護師は訪

問を続け、今年になり呼び出し状のような郵便物が届いていることに気づいた。家主の都市再生機構（UR）が裁判所を通じて滞納家賃の支払いを求めており、強制退去に向けた手続きに入っていた。

差し迫った状況を女性に説明し部屋に入った。ワンルームの室内は郵便物や生ごみでいっぱい。女性は預金先を思い出せず、通帳も見つからない。要介護認定を受けると、認知症で「要介護1」に。事情を聞いたUR側は手続きを取り下げた。

女性は行政の支援を受け、今は施設で暮らしている。セキュリティーの厳しいマンションで、住民との交流もなかった。看護師と偶然出会わなければ退去させられ、路上で人知れず亡くなっていたかもしれない。

常盤平団地の女性が友人たちと交換した部屋の合鍵。「これが幸せのカギです」と笑う＝千葉県松戸市で2010年、水戸健一撮影

高度成長期に都市部に建設されたニュータウンや団地群で、残された親世代の高齢化・独居化が進む。孤独死がいち早く問題化した地域では、新たな絆（きずな）も生まれている。

「孤独死ゼロ作戦」で知られる千葉県松戸市の常盤平団地は、60年の入居開始から今年50年を迎えた。約5400世帯、65歳以上の住民は36.9%（09年4月現在）。自治会は住民のあいさつ運動や民生委員の戸別訪問などを進めている。かかわりを拒む人も少なくないが、自治会長の中沢卓実さん（76）は「バラバラになった家族の絆を、地域の力で補うことはできる」と話す。

ここで3年前まで民生委員をしていた女性（78）には、忘れられない出来事がある。洗濯物をあまり干さず、近所付き合いも少ない男性がいた。高齢者の集会に誘うと「美人がいないから行かない」とかわされた。それでも3、4年通い続けるうちに、少しずつ身の上話をしてくれるようになった。

胃腸が弱く、あまり食事ができないこと。離婚し、元妻と一人息子が北海道にいること。「死んでも、息子は来てくれないだろうな……」。男性は「何かあった時に使ってほしい」と、女性に自室の合鍵を渡した。その鍵を使う日が来るとは想像もしなかった。

「ドアをロックしても応答がない」。5年ほど前の春、女性は男性の上階の住民から連絡を受け、胸騒ぎを覚え駆けつけた。部屋に入ると、男性は台所の机に突っ伏して冷たくなっていた。死後1日。82歳だった。

女性は身の上話で知った情報を警察に伝え、一人息子と連絡がついた。男性の想像に反し、息子は遺体を引き取りにきた。せめてもの救いと思えた。

そのころ、女性自身も夫を亡くし、1人暮らしになっていた。「40年以上連れ添ったので、喪失感が大きかった」。夫婦で歩いた道を一人で歩けず、ひきこもりがちだった。ある日、玄関のベルが鳴った。「一人にさせないよ。私が面倒を見るから」。長年近所付き合いをしてきた同年代の女友達が、おすそ分けの手料理を持って立っていた。

女性は友達に合鍵を渡した。「これを持っていて。何かあったら、すぐに見つけてね」。友達も自分の合鍵を託した。

常盤平団地では、合鍵を持ち合う高齢者グループがあちこちでみられるようになった。「ここなら一人でも安心して暮らせるの」。お守りのように、女性が束ねた鍵をギュッと握った。近く三つめの合鍵が加わるといふ。【遠藤和行、水戸健一】



絆はなぜ切れた：高齢社会の家族 / 5 止 識者に聞く 芹沢俊介さん / 香山リカさん

高齢社会の中で、希薄化する家族の関係をみてきた連載の最終回として、変容する家族

の背景をどうみるか、老いを支え合っていくために、どういう方向を目指すべきなのかについて、2人の識者に聞いた。

血縁を超えた関係づくり、重要 - - 社会評論家・芹沢俊介さん(68)

私の父(96)と母(94)は2年半前から民間の介護施設で生活しています。週に一度は顔を見にいき、2時間は話をしますが、2人の存在が自分の中で希薄になっていることを実感します。私の周囲には、親が入居先でどのように暮らしているのかを知らない人が多く、見舞いさえしない人もいます。

今回の高齢者の所在不明問題の背景には、家族の空間が縮小してきたことがあるでしょう。戦後の日本の家族の空間は、3世代が同居する大家族、親を排除して夫婦と子どもだけでつくる核家族と徐々に空間を狭め、70年代についに核家族の内部もバラバラになりました。

現代の家族は互いが、良くも悪くも、無関心であることを前提に成り立っていると言えます。しかし、それは人と人の絆(きずな)が切れたというよりも、絆の結び方が変わったのだとも表現できます。無関心と孤独は背中合わせです。これから迎える超高齢化社会で、適度な関心と適度な孤独を手探りしながら、幸福感を得るため、どのように生きればよいのでしょうか。

家族の絆を取り戻そうとするのでなく、血縁を超えた関係をつくる試みを進めている地域があります。連載記事にあったように、団地で独り暮らしをする高齢者が互いに合鍵を交換し合う姿はよい例でしょう。また例えば、血縁のない障害者と軽度の認知症患者たちが一緒に暮らしているグループホームに、健常な高齢者が加わることもできるはずで

す。高齢者の所在不明問題で日本社会の貧しさが表面化しました。夫婦ですら個別の生き方を考える社会で、今後は、家族の枠組みを超え、互いに必要性を共有できるような空間づくりが重要になると思います。【聞き手・水戸健一】

弱者受け入れる価値観を - - 精神科医・香山リカさん(50)

「無縁社会」という言葉がキーワードになり「孤独死は悲惨で避けなければならない」という恐怖が広まっています。私の診察室にも「消えた高齢者になってしまうのではないか」「親を孤独死させてしまうのではないか」という方が来ます。

本当は関心を持ってほしいのに、孤独死したり所在不明になるお年寄り是不本意でしょう。でも、「消えた高齢者」の問題を考える時、「昔はもっと家族が温かかった」というのは少し違うように思います。

精神科医になった25年近く前から、家族の問題で苦しむ人は多くいました。ただ当時は「嫁はしゅうとめをみるべきだ」といった「世間の目」や家族のしがらみが強く、離れたたくても面倒をみざるを得なかった。しがらみのおかげで、高齢者が消えずに済んだかもしれませんが犠牲になる人もいたわけです。

今、自分がうつ病だったり、仕事がなく追いつめられていて、親に連絡を取りたくても取れない人も多い。自己中心的な人ばかりが親を放置しているわけではないです。

これからの老後は、知人・友人のネットワークや社会的サービスに頼らざるを得なくなります。この時、お互いが「お世話になる」という感覚を持たないと、支え合うのは難しいでしょう。また弱い立場にある人を受け入れる価値観を持つことが大切になります。社会全体が余裕を失い、効率を追求するようになると、高齢者や病気、障害をもった方たちを排除する傾向に向かう恐れがあります。

お年寄りが地域や家庭にいる方が、何かの助けや向上につながっていく。多様な人がいた方が活性化して持続可能な社会になる。そうした考え方の中に解決のヒントがありそうです。【聞き手・山崎友記子】

人物略歴 **せりざわ・しゅんすけ** 東京都出身。文学、思想、家族などの幅広い分野で評論活動を行う。著書に「家族という絆が断たれるとき」。**かやま・りか** 北海道出身。立教大教授。現代人の心模様を軸に広く社会問題を論じる。著書に『『悩み』の正体』『親子という病』など。

明日はある...か? : どうする負担増 / 1 社員の社会保険料、正直に払えない



企業、偽装で節減 「退職」「倒産」生き残るため

「まじめに社会保険料を払ってたら、会社がもたないよ」。健康食品会社の女性社長は、いら立ちを抑え、語り始めた。保険料を節減するため手を染めた「偽装工作」。指南したのは、決算を相談していた会計士だった。

手口はこうだ。従業員約10人を表向きには退職させ、厚生年金と健康保険の加入対象から除外。実際には、新たに設立した派遣会社で再雇用し、保険料の会社負担がない国民年金と国民健康保険に移ってもらった。退職させなかった社員4人も給料を半分に過少申告し、年200万円の保険料を節減した。それでも、本業では主力の高級輸入食材の売上高がリーマン・ショックで半減し、09年度は約700万円の赤字に陥った。「悪いことだとは思うけど、やらなきゃつづれる」

法人企業は厚生年金、健康保険の保険料を従業員と折半で負担しなければならず、個人事業でも常時5人以上が働いていれば加入義務がある。だが、総務省が06年9月に公表した調査結果では、厚生年金に加入すべき事業所のほぼ3割に当たる63万~70万力所が加入漏れの可能性があり、これらの従業員は約267万人に上る。東京都内の社会保険労務士は「社会保険料を払わなくて済む抜け道はいくらでもある」と話す。

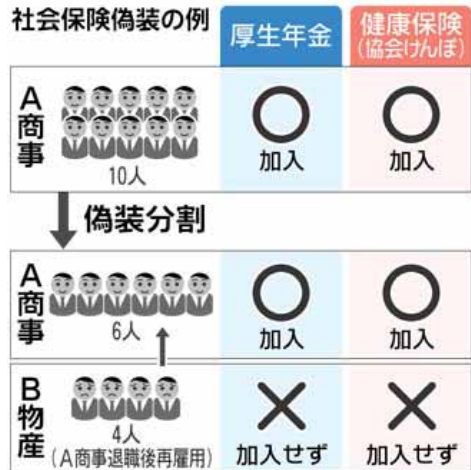
茨城県で運送業を営む男性(50)は9年前、社会保険料を逃れる手口を「社会保険事務所の職員に耳打ちされた」と証言する。営業を続けながら休業を装い約100人の従業員全員が休職したとする「全喪届」を出し、年4000万円の保険料を浮かした。

従業員のうち30人を「全喪」扱いにしている北海道南部の建築業の男性(63)は別の手も使っている。全喪扱い以外の従業員40人に少人数単位で個人事業主グループを作らせ、それぞれと契約する形にし、多い時で年5000万円の保険料を節減した。休業どころか倒産を装って保険から抜け、別会社で事業を続ける偽装倒産も後を絶たない。

「社員の安心のため社会保険は必要」。ゼネコンの2次下請けで鳶(とび)業を営む都内の男性(40)は、同業者のほとんどが加入していない厚生年金と健康保険に88年の創業時から入っている。保険料負担のない同業者はその分、工事単価を引き上げる体力があり、入札で勝つのは容易ではない。「保険料がさらに上がれば、払っていない会社との差は開くばかり。『社員の安心のため』とはいえ、会社がつぶれたら元も子もない」

会社にとっては生き残りのための保険料節約だが、従業員は将来不安にさらされる。厚生年金から国民年金に替わると、保険料は安くなるが年金の平均給付額は3分の1程度に減ってしまう。機械メーカーと委託販売員の契約を結ぶ東京都八王子市の男性(46)は、勤務実態は正社員と同じだが、個人事業主扱いとされ厚生年金に入れない。「会社は保険料コストを削りたいのだろうが、老後はどうなるんだろう」

会社が保険料を節約する一方、生活苦から国民年金にも国民健康保険にも加入しないケースも多い。従業員が社会保険に入っていない茨城県の建設会社の女性役員(35)は「若



い社員は目の前の生活費確保で精いっぱい。保険料を払う余裕はない」と話す。

国民のセーフティーネット（安全網）であるはずの社会保険だが、保険料負担の重さが中小・零細企業や働き手を苦しめ、その役割を果たせなくなりつつある。

少子高齢化など社会構造の変化で増え続ける社会保障費。今の日本の社会保障を維持するなら、医療・介護・年金の社会保険料の引き上げか、増税を国民が受け入れるしかない。しかし、「消費税10%」を打ち上げた菅直人首相は、参院選大敗後、沈黙を決め込んでいる。税制論議が進みそうにない中、保険料をさらに引き上げる余地はあるのか。負担にあえぐ、現場を歩いた。

厚生年金、協会けんぽの保険料率推移



※総報酬に対する割合。

明日はある...か? : どうする負担増 識者の話

増税で財源確保を - - 大沢真理・東大社会科学部教授

日本の社会保障財源は社会保険料の比重が大きく、低所得層ほど負担が重くなる構造だ。その結果、非正規雇用の増大などとともに、国民年金や国民健康保険の保険料未納、未加入率が上昇し、制度の空洞化が進んだ。財源の偏りを小さくするため、配当、利子など資産性所得を給与と所得と合算するなど課税ベースを広げ、所得税率を引き上げるべきだ。消費税増税にも手をつけざるを得ないだろう。

無駄削減で医療費抑制 - - 八代尚宏・国際基督教大学教授

無駄の削減が欠かせない。例えば、診療報酬も治療が長引くほど上がる「出来高払い方式」を、病気ごとに報酬を定額制で決める「包括払い方式」にすれば、効率の良い治療を医師に促し、コスト意識を高める。財源確保には消費税を社会保障目的化し、増税するしかない。年金、医療の充実のため税率を上げるか、増税が嫌だから年金、医療を抑えるかを国民も選択しやすくなり、給付と負担の均衡に寄与する。

明日はある...か? : どうする負担増 / 2 介護保険料、日本一の町

安心、高過ぎる対価

八甲田山のすそ野に開ける青森県十和田市。09年4月、3年ごとに見直される介護保険料が全国市町村で最高になった。65歳以上の人毎月払う介護保険料は基準額で5770円と全国平均(4160円)を4割近く上回り、最も安い福島県檜枝岐(ひのえまた)村(2265円)の2.5倍に達し、年金暮らしを直撃する。

市中心部の特別養護老人ホーム「八甲荘」には高齢者50人が暮らす。入居費用は月6万~7万円で、年金生活でも無理をすれば何とかなる。入居前は1人暮らしだった女性(81)は八甲荘での生活が7年目。「家族のように介護してくれて安心」と話す。介護保険料の負担は重い。

市区町村で運営する介護保険制度が始まった00年度の介護費用は日本全体で3.6兆円だったが、高齢化の進展で09年度は7.7兆円になった。このうち1割は利用者が負担、残りを公費と40歳以上が払う保険料で折半しており、仕組みが変わらない限り、保険料は上がり続ける。

高齢者が多いほど保険料は高いのが普通だが、十和田市は高齢化率が約24%で県内40自治体の下から7番目。それなのに保険料が高いのは、特養など公的施設に入れにくい高

齢者の受け皿として民間施設開設が相次いだためだ。市内には民間高齢者住宅、有料老人ホームが11施設あり、5施設が建設中。民間施設は訪問介護サービスを利用することが多く、コストがかかる。

民間施設の増加で、十和田市では介護認定を受けた人のサービス受給率が95%と全国平均の81.5%を大きく上回る。施設数が追いつかず、なかなか介護を受けられない首都圏に比べ高齢者の安心感は大きい。民間施設の利用には重い負担への覚悟も必要だ。

有料老人ホームに10年間入所していた母親を昨年、亡くした自営業の男性(56)は、無年金だった母の代わりに月12万円の費用を負担し続けた。「母が亡くなり、もちろんつらかったが、正直ホッとした部分もあった」

十和田市内に住む主婦(61)は、自宅で認知症の母親(96)を介護する。特養や有料老人ホームなどの介護施設に入れるとなると、夫と2人では費用を負担しきれず、「親せきにすぎない」。

母も介護保険料を払っているが、介護サービス利用は月4500円の車いすだけ。やり切れない思いは、自分の将来への不安につながる。子どもはなく、寝たきりになっても介護してくれる身内は夫だけ。「受け取れる年金は10万円程度。こんな高い保険料を払っていてもサービスを利用できないかもしれない」

介護保険料が5000円を超えるのは十和田市も含め全国で64自治体。09年度改定で保険料が5568円となり上昇率が61%と全国一だった山梨県早川町は、来年4月オープンの特養の整備に3億円かかったことが急上昇の主因だった。

甲府市内の病院に月2回通院する1人暮らしの女性(78)は「通院費用は月1万円。さらに介護保険料の負担は年金生活には厳しいが、若者がどんどん減る中、高齢者が支え合うしかない」とあきらめ顔だ。

12年度の改定では、全国平均の介護保険料も「5000円を上回りかねない」(厚生労働省)。十和田市の藤田譲・高齢介護課長は「税などで国にもっと負担してもらわないと介護保険制度は崩壊する」と警告を発する。

明日はある...か? : どうする負担増 / 3 都市の特養、狭き門

脳梗塞(こうそく)で倒れ、昨年9月に亡くなった夫を約6年半、老老介護で支えた東京都東村山市の無職女性(69)は今も釈然としない。言語障害と両手両足のまひで要介護度が2番目に重い4となった夫を最初の2年間は自宅で介護したが、「共倒れになる」と不安になり、特別養護老人ホームを探し始めた。

だが、家族と同居していることもあり、入所は後回し。リハビリ主体の介護老人保健施設に入ったが、費用は特養より4万円も高い月15万円だった。特養に入れたのはその2年後で、その間、100万円近く出費がかさんだ。「同じ保険料を払っているのに施設によって負担が違いすぎる」

無職の次男(43)も昨春、脳出血で倒れた。左手にまひが残り、家賃1万4000円の都営団地で一緒に暮らす。自身も手のしびれで訪問サービスの対象になる要支援1と認定された。月15万円の年金に頼る2人暮らしに、介護保険料5676円と介護サービスの自己負担(計1万円弱)は重い。「私が倒れたら、障害を抱えた息子と2人、どうすればいいのか」

特養の入所待機者は09年12月現在、全国で約42万人。しかも、国立社会保障・人口問題研究所によると、25年には75歳以上の後期高齢者が東京都で206万人(現在115万人)になる。神奈川県も147万人(同75万人)、大阪府151万人(05年で65万人)、愛知県115万人(09年で63万人)と、いずれもほぼ2倍に膨らむ。一方、介護施設の整備計画(06~08年度)の達成状況は、東京44%、神奈川54%、大阪64%、愛知60%。特養に入りたくても入れない人は増えるばかりだ。

施設整備遅れの背景には、都市部の地価の高さに加え、人材集めの難しさがある。

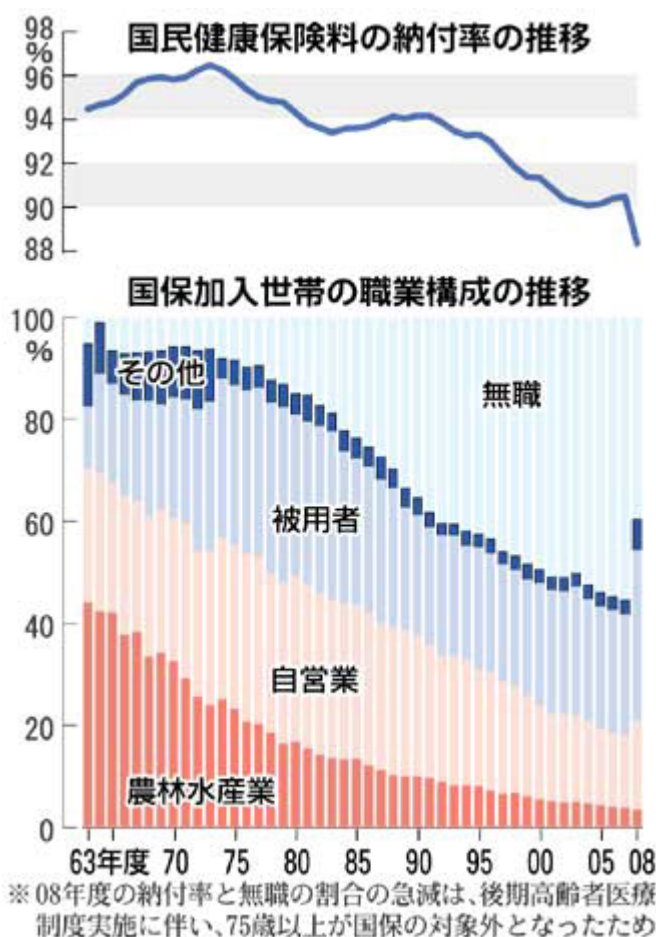
東京・多摩地域で在宅介護を展開する西都保健生活協同組合（東京都清瀬市）の30歳の女性ヘルパーは、今月10日朝、出くわした光景に体が凍り付いた。ひとり暮らしの男性（76）が住む団地で呼び鈴を鳴らしても応答がない。ベランダから部屋をのぞくと、トイレから足を投げ出すように倒れ、死亡していた。

介護ヘルパーの仕事は食事、就寝準備がある朝夜に集中する。西都組合の介護利用者は180人。ヘルパーは1日平均4～5人の自宅を訪れ、約1時間の間に食事の準備から着替えの手伝い、排せつ処理などを済ませる。月給は多くても18万円程度。07年に90人いた職員は70人に減った。宮脇正和副専務理事は「職員の応募はほとんどない。土、日はサービスを断ることもある」と肩を落とす。

平均年収が08年で200万円台と全産業平均を100万円ほど下回る介護職は、働き手が見つからず、有効求人倍率は今年4月時点で全産業（0・42倍）を大きく上回る1・11倍。08年の離職率も18・7%と全産業（14・6%）より高い。

国は25年に介護職を最大で現在の2倍近い255万人まで増やす方針を示しているが、09年に始めた介護職の給与改善策は11年度までの暫定措置。大和総研の鈴木準主任研究員は「このままでは保険料は上昇し続ける。介護施設拡充に必要な人材確保には、税の比重を上げていくしかない」と指摘する。

明日はある...か? : どうする負担増 / 4 不況が「国保」直撃



「保険料の滞納中に突然がんになるなんて」。大阪府守口市で自動車部品関連工場を経営する男性（59）は09年3月の早朝、激しい腹痛に襲われた時のことを振り返る。連帯保証していた知人の会社が倒れ、借金約3000万円を肩代わり。景気低迷で受注も減り、07年初めから国民健康保険の保険料（月額約5万円）を滞納。08年10月末以降は保険証がなくなった。

腹痛の原因は直腸がんに伴う大腸破裂で、即刻手術しなくてはならない。滞納分には到底足りないが、なけなしの生活費6万円を市に納め保険証を発行してもらい、間一髪で医療費150万円の全額自己負担を免れた。

現在は所得がほとんどなく、保険料は月3000円に減額されたため、長女（20）のアルバイト代から何とか払っている。「娘の稼ぎをあてにするなんて情けない。円高もあって工場の仕事が今後、増える見込みはないが、保険料を払えない同業者に比べたら、まだましだ。

市町村が運営する国保は自営業者や退職者など全国で約3600万人が加入。景気悪化で保険料を払えない人が増え、08年度の保険料納付率は前年度より2・14ポイント低い88・35%で過去最低となった。高齢者医療制度の改革で、納付率の高い75歳以上

の高齢者が国保加入対象ではなくなったことも、納付率を押し下げた。

この結果、08年度の保険料収入は前年度比7023億円減の2兆8011億円にとどまり、国保の実質収支は2384億円の赤字になった。赤字額自体は前年度の3620億円から改善したが、大企業の健保組合や中小企業でつくる協会けんぽなどから、65~74歳の前期高齢者医療費向けに2兆円以上の支援を受けた結果で、国保単独では立ち行かない。

国保は1961年、自営業者や農林水産業者向けに全国で導入されたが、08年度の加入世帯に占める自営業者らの割合は約2割と導入当初の7割程度から激減。一方、6~7%だった無職世帯の割合は08年度で39.6%と全体の4割近い。「失業で健康保険を国保に切り替える人の収入はゼロに近く、保険料軽減措置はあっても負担は重い」(厚生労働省国民健康保険課)

大阪府河内長野市の無職男性(48)は、今年1月から働いていた派遣会社から8月に雇い止めにあった。生活するのがやっとだった1~3月は国保の保険料を滞納したが、無保険で病院に行けなくなる恐怖から、滞納分の計7万2000円を2年がかりで分納し始めたばかりだった。「派遣の仕事では貯蓄もできない。職を失い、保険料を払う余裕も即座になくなった」

以前、住んでいた奈良県御所市でも滞納経験があり、その時の30万~40万円も7~8年かけて分納しており、保険料が多重債務としてのしかかる。「健康を人質にとられて厳しい取り立てにあっているようなもの」

景気低迷の長期化を背景に増加する非正規雇用労働者や失業者のセーフティーネット(安全網)としての役割が増し、国保の財政は厳しくなる一方だ。しかし保険料を上げれば、低所得者はますます滞納、未納に追い込まれる。みずほ総合研究所の堀江奈保子・上席主任研究員は「(健康保険組合など)他の保険者からの追加支援や税金投入で、医療の安全網としての国保の役割を確保する必要がある」と指摘している。

明日はある...か? : どうする負担増/5止 高齢者医療が健保直撃

東北有数の温泉レジャー施設「スパリゾートハワイアンズ」(福島県いわき市)。映画「フラガール」のヒットで07年度入場者数は161万人と過去最高となったが、その陰で施設を運営する常磐興産の健康保険組合が09年4月、ひっそり解散した。常磐興産グループはリゾート施設のほか業種が多岐にわたり、企業間の関係が薄い。組合最後の常務理事、下山田敏博さん(50)は「健保組合はグループ企業を結ぶきずな。残したかった」と無念そうに話す。

ハワイアンズ以外の石炭卸売りなどグループ全体の経営は厳しく、1952年の設立時に1万3000人いたグループ社員は2600人に減少。保険料収入も激減し、健保組合は慢性赤字に。追い打ちをかけたのが、健保組合に課せられた高齢者医療向けの拠出金。「拠出金が年間支出の4割以上になり、解散して協会けんぽに移るしかなかった」

日本の医療保険制度は、主に大企業向けで比較的財政に余裕のある健保組合と中小企業が中心の協会けんぽなどが、高齢者医療や自営業者らの国民健康保険を支える。高齢化の進展で健保組合の高齢者医療向けの負担は強まる一方で、保険料収入に占める拠出金の割合は00年度の38.4%から09年度は過去最高の45.6%に達した。

景気悪化で保険料収入も減り、全国1473組合(10年3月末現在)全体で09年度は過去最悪の5235億円の経常赤字で、赤字組合数は8割に上る。赤字組合は保険料率を上げざるを得ず、保険料の半分以上を負担する会社を圧迫する。ここ10年で300組合が次々解散した。日本総研の西沢和彦主任研究員は「国民が嫌がる増税論議を避けてきた結果、健保組合などが過度の負担を強いられている」と指摘する。

「年間支出約7億円の半分近くを高齢者医療への拠出金に取られ、組合員への十分なサービスを維持できなくなった」。今年6月、健保組合を解散した百貨店「井筒屋」(本社・

北九州市)の幹部は悔しさをあらわにした。社員・家族は協会けんぽに移行。健保組合の保険料は会社側56%、社員44%の負担だったが、協会けんぽは折半で社員の負担は月800~1680円増え、組合独自のサービスも受けられなくなった。40代の男性社員は「このご時世、協会けんぽでも、あるだけまし」と話す。

「人間ドック補助、出産一時金付加の廃止」「乳がん検診有料化」。東京都内の派遣社員の女性(42)は今春、「人材派遣健保組合」(約280社加盟)から、健保独自のサービス廃止・縮小と保険料率引き上げを通告された。同組合は02年に複数の派遣会社が共同設立した。

だが、08年度からの高齢者医療向け拠出金などの負担で保険料は上昇。今年度の1人当たりの保険料負担は最も安かった06年度比約3000円増の平均月9500円。女性はこの10年、9社で働いてきたが、「保険料は高いのに、サービスを削られてまで健保組合に入っている意味はない」と考え始めている。

高齢化社会に押しつぶされそうになっている医療、介護、年金。社会保険と税のバランスをどう取るべきか。議論を急ぐべき時にきている。

(田畑悦郎、窪田淳、永井大介、中澤雄大、宇都宮裕一が担当しました)

障害者の自立 郵便局橋渡し...施設で作った菓子、おもちゃのチラシ置く

読売新聞 2010年09月23日

近畿地方などの24か所の授産施設が10月から半年間、障害者たちが作った木製のおもちゃ、焼き菓子のチラシを近畿約3100か所の郵便局に置いて売り出す。障害者の自立支援に向け、郵便局という地域に密着した場所を生かして販路拡大につなげる取り組みだ。

授産施設製品の共同受注、販売を手がけるNPO法人「トゥギャザー」(大阪市)の企画。郵便事業会社の「年賀寄付金配分事業」に今年度、採択され、配分される500万円はチラシ作製や発送の費用に充てるといふ。



10~12月は奈良、北海道などの4施設が製造する積み木(4500円)や絵合わせ(3800円)など木製の知育玩具を扱う。間伐材や端材を生かし、安全性にも配慮したという。

来年1~3月は、大阪や奈良などの20施設がつくったマドレーヌやクッキーなどの詰め合わせをギフトセットとして販売。うち18施設の職員は今年6月から、辻学園(大阪市)のパティシエの指導を受け、品質向上を図ってきた。

「トゥギャザー」理事長の中條桂さんは「郵便局なら多くの人の目に触れやすく、販路拡大の大きなチャンス。最寄りの郵便局で多くの人がチラシを手にとってくれることを望みます」と話す。問い合わせは「トゥギャザー」(06・6646・3380)へ。

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行